



【発表後に質疑応答する中学年】

立春の教室の声高々と

→斑入りのヒイラギ。葉の緑が尖ったものと、そうでないものが混ざっています。

一月二十五日の「ふれあい授業参観」で、三年生以上は清流学習の成果を発表した。次に紹介するのは、ごみ拾いの体験を紹介した六年生の発表の一部である。

最初はごみが全然なくてきれいな町だなと思いながら歩いていました。でも、よく見てみると、竹藪の中に風で飛ばされたペットボトルが何本も落ちていました。それだけではなく、かくされているかのように鉄パイプの切れ端が大量に捨てられているのも発見しました。見えていないだけで、たくさんのごみがあるんだなと少し残念に思いました。そして、R君が調べた不法投棄のことを思い出し、それから人目につかなそうなところをよく見て歩くことにしました。すると、古タイヤや…（中略）…僕たちは、重たくても、こんなものが青木川に落ちて流れていっては大変だと思い、頑張って拾いました。

坂道を歩いている途中、看板をたくさん見つけました。おそらくポイ捨て禁止などと書かれていたものだと思います。でも、どの看板も壊れていて、看板自体がごみのようになってしまっていました。狭い地域でのごみ拾いだったけど、見えないところにたくさん落ちていたことがショックでした。人が少ない地域にもこんなにごみがあるのに、たくさん人が住んでいる都会の中には、どれくらいごみが落ちていのか気になりました。（以下略）

六年生は発表準備として、まず各自の気付きを持ち寄って一次原稿を作ったという。その後、発表内容の順番、状況や心境を表す言葉を吟味して二次原稿に仕上げたそう。この過程で事実の整理はもちろん、自分や友達を感じたことを共有し、事象を解釈し、自分たちの思いにびつたりという言葉を探した。不法投棄の理由や場所、処理費用を個人追究したR君は、「捨てる物に今さらお金をかけたくないのかな」と、人の心理を推察している。また、世の中で活用されている先端技術への感動を聞き手に伝えるとともに、自分にできることは何かを考えた。

このように、子供たちは青木川の環境を発端に、人の暮らし、心の在り様、人類の知恵にも目を向ける。その間、友達と思いや考えが異なるときにこそ、互いに聞き合ひ、新たな発見を得て考えを深める。ここに協同的な学びの面白さがある。

こうした学びをさらに楽しくするために、自分の思いにびつたりという言葉を選んで表現する力を各自が付けることが肝要である。違いに気付く五感と、それを表現する語感を磨くことは、全ての授業や生活の中で積み上げていきたい。



【青木川にいたオイカワを見る1年生】